NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

He remembered dying. Nothing after.

BOOK I

第5章　老いることのない部品

THE PART THAT WOULD NOT AGE

老技師はロイの問いに答えなかった。沈黙が一種の検査になるほど長いあいだ。

作業台の上では六つの低電圧灯が、それぞれ違う高さで唸っていた。どれも人の顔を識別するほど賢くない。排気扇が不規則に擦れる音を立て、ガラスの仕切りの向こうでは顎を外された若い女が、恐怖を隠そうともせず成り行きを見ていた。

ロイは動かなかった。技師はすでに一度後ずさっている。二人の間の正確な距離が、必要以上に重要に思えた。男の指関節は銀色の添え木で補強されていたが、それ以外は、この街の診療所がとうに治療をやめた種類の老いに侵されていた。

「いつだ」とロイは繰り返した。

「その時も英語だった」技師は自分の記憶に驚いたようだった。「女と一緒に来た。支払いは水利権だ。本物の権利だぞ。市の空手形じゃない。あんたは今と同じ位置に立って、神経系が一度の身体交換にどれほど耐えるかと訊いた」

「女の名前は」

「聞いていない」

「支払いのことは覚えているのに」

「馬鹿げていたからな。ありえない身体。上階の所有者のような服装をした女。そして貯水池が二度も民営化された地域の降雨量と引き換えられる証票。確かめられることは覚えている」

男は椅子を引いたが、座らなかった。「顔はもっと若かった。照明がよかっただけかもしれん。識別番号はゼロセブン。旧型のサービス端子から刻印を読んだ。NEXUSYS、Sが二つある。担当技師が製品名を誤記したものだと思った」

「ゼロセブン」

「知らないのか」

ロイは部屋の出口を見積もった。背後の昇降機は現地電源がなければ開かない。別の扉は溶剤保管庫へ続く。ガラスの向こうの女は、修理工場に来る危険な男たちに慣れた者の、辛抱強い怯え方で彼を見ていた。

「屋上を覚えている」とロイは言った。「そこで死んだことも。その次には、知らない街の六階にある部屋で目覚めた」

技師は椅子に腰を下ろした。「それなら多くを説明できる。あるいは何ひとつ説明しない」

「おまえは誰だ」

「イスカンダル・ヴェイル博士。この地区じゃヴェイルで通る。博士号を認めてくれる管轄区域など、今では一つもないが」

彼は機械式の引き出しを開け、古さで斑になった透明な薄板を取り出した。角はテープで補修されている。「ここにネットワークはない。検査を望むなら、装置にとって正体不明の人間であることを我慢してもらう」

「これまでの装置もそうだった」

「装置があんたを不明だと告げるのと、装置にとって本当に不明であるのは違う」

ヴェイルは仕切りの向こうの女に合図した。彼女は立ち上がり、口の下に露出する接続器へ仮のシールドを装着すると、盆を持って検査室へ入ってきた。サミラという名前が、手首に縫いつけられた布帯に印刷されていた。ロイには、彼女が見られたくないものが見えた。顎だけでなく、恐怖まで交換できたらよかっただろうに。

「彼は君を傷つけない」とヴェイルが言った。

「わかるんですか」とサミラはシールド越しに尋ねた。

ヴェイルはロイを見た。「いや」

その正直さが緊張を少し和らげた。サミラは盆を置いた。

◆ ◆ ◆

深圳の市民登録制度のもとで身体を検査する方法は三つあった。認可された方法は結果を省のクラウドへ送り、無認可の方法は診断を意図的に偽装するよう改造した機械を使う。ヴェイルが実践する第三の方式は、そのどちらよりも古いものだった。検査機器が観測していないふりをせず、その観測を国家に知らせない方法だ。

ヴェイルはコートとシャツを脱ぐよう求めた。目の前の男は痩せても太ってもいない。肩は、それが支える質量に見合う幅を持っていた。胴体には生身の肉体にありがちな非対称がある。皮膚は筋肉の上を滑り、すべてを製造した者の存在を疑わせない。

「傷跡は」

「見覚えのあるものはない」

「答えになっていない」

「これ以外の答えは持っていない」

ヴェイルは携帯式磁力計をロイの胸にかざしたが、何も言わずに脇へ置いた。走査が終わるより前に計測範囲を超えたのだ。次に取り出したのは、回転する紙のドラムを備えたさらに古い装置だった。そこから細かく震える曲線が続々と吐き出された。

「前の身体にも似たものは見た。だが、これは違う。ゼロセブンは粗雑だった。あの時代の技術を超えていた装置に粗雑という言葉が当てはまるならな。あれは橋だった。これは橋の上に造られた都市だ」

「何世代あった」

「七から十一までか。計算上は四回の移行だ。言えるのは計算だけだよ」

ロイはプリンターから進む紙を見つめた。ヴェイルの言い方には奇妙な親密さがあった。医師は一度見たことのある臓器について語っている。しかし臓器の側はその医師を覚えていない。

「あと何年生きられる」

ヴェイルはためらいを隠さなかった。「走査ではわからない。寿命は機械の内側に貼った製品ラベルじゃない。心臓だけが先に止まる人間もいれば、人工神経格子の接合が、周囲の身体より先に破綻する場合もある。どの部分が限界を決めるのか突き止めなければ」

「突き止めろ」

ヴェイルは不承不承うなずいた。

ロイの脊椎に沿って受動接点を取りつける。通常の検査なら能動誘導で内部を照らすが、彼はそうしなかった。個々の端子は独立したアナログ増幅器に接続され、増幅器はそれぞれ別の記録帯へ書き込んでいく。装置同士が互いの観測結果を知る必要はない。

五番目の接点で、サミラは器具を並べる手を止め、波形を見つめた。

「この位相、安定するはずがありません」

「安定はしていない」とヴェイル。「計器が誤差を記録するより早く、自分で補正している」

ロイは首にかすかな振動を感じ、その直後、息をこらえていた何かが解放される感覚を覚えた。体内の機構が検査装置を予測し、干渉を打ち消したのだ。彼自身は何も命じていない。

「やめろ」

ヴェイルはただちに手を上げた。波形は一直線になった。

「なぜだ」

「俺の身体が、おまえの検査を攻撃と考えているかもしれない」

ヴェイルの表情が変わった。今度は恐怖ではない。見覚えのあるものを見つけた顔だった。

「ゼロセブンも同じ拒絶反応を示した。あの女は脅威反応を誘発するなと言った。筋肉の暴走から我々を守ろうとしていると思ったが、今ならわかる。測定結果を、あんた自身の神経系から守ろうとしていたんだ」

◆　◆　◆

密閉された検査室の外で、修理市場は国家の台帳に載らない小さな単位で所有権を交換していた。盗品の光学装置一式が腎臓の濾過時間半日分に化け、山岳共同体の水クレジットが違法な冷却室の使用料一週間分となる。

回廊の屋根の下を漂う識別ユニットが、航路更新要求を受信した。正規の市営保守チャンネルからの要求だった。ただし保守記録用の欄には、そこにあるべきではない圧縮命令が隠されていた。

ユニットはそれに従った。二機目には軍事請負企業から別の指示が届く。識別の確信度が十分に高くなるまでは接近するな。両機は命令の対象が同一人物だと知らなかった。異なる認証制度が一つの街に積み重なることの、数少ない利点だった。

市場からはるか上、窓のない借室で、一人の女が水道保守網の公開トラフィック統計を確認していた。画面に異常は出ていない。だが、二つの監視群が同じ無認可の回廊へ広がり、そのうち一群だけが公共の登録経路を通っていなかった。

翌朝、彼女の雇い主は都市の水供給レジリエンスに関する新たな声明を発表する予定だった。その会社は人工生命について一度も公表したことがない。

◆ ◆ ◆

ヴェイルは鎖骨の下の細い縫い目に、組織を温めず透過する光を当てた。投影像に銅色の輪が一つ、次にもう一つ現れ、最後に周囲のどの装置よりも古めかしい接点群が姿を現した。

「ここだ」とヴェイル。「製作者は感傷家らしい」

「どういう意味だ」

「周辺演算器は新しい。流体の制御面も新しい。伝送格子など、上限を測る計器さえ持っていない。しかしこの端子なら、俺がまだ認可を受けていた時代にも修理できた」

画像を回転させた。八つの接点が中央のソケットを囲んでいる。ソケットは空だ。固定板には、現在の機械彫刻にしては不規則な細かい刻みが残っていた。

「同じ部品か」

「同じ系列だ。何年も前に検査した実物そのものかは言えない。合金は鈍く、絶縁体は硬い。五世代も生き残る理由のない設計を、誰かがわざわざ複製したんだ」

ヴェイルは別の画像を呼び出した。退色した旧式カラー写真。狭い余白には手書きの索引がある。手術用の膜の下に身体が横たわっていた。顎の角度、肩、首の形に、ロイは自分を認めた。だがそこに横たわる身体を生きた記憶はない。

索引にはこうあった。NEXUSYS / 07。

同行した女の写真はなかった。

「続きは」

「残したのはこれだけだ。当時も記録を持つことは危険だった」

「ゼロセブンはどうなった」

「あんたは自分の足で帰った。口数は少なかった。女は全組織交換のあとに元の神経構造が保持されるかを訊いた。二つの身体が一つの連続性署名を共有できるかとも。何をもって同一人物と言うのか定義しない限り、質問に意味はないと答えたよ」

「名前は言わなかったのか」

「いや」

「企業名は」

「ない。ただ、技術には訛りがあった」

ロイは黙って見た。

「製造者は殻を替えれば機械の出自を隠せると考える。だが手法には癖が残る。問題の分割の仕方、許す妥協、決して動かさない接続。昔、タイレルの部品に似た考え方を見たことがある」

ヴェイルは画像の八つの接点に触れた。「これは癖だ」

ロイは恐怖よりも気味の悪いものを覚えた。記憶を伴わない認識だ。写真にある過去の自分の各部を区別できても、その身体の中にいた感覚を呼び戻すことはできない。十一年という時間は、少なくとも彼の意識には経過していなかった。

「鍵かもしれないのか」

「錠前かもしれん。二つは別の問いだ」

◆ ◆ ◆

減少を最初に見つけたのはサミラだった。高出力導管の周辺を巡る液体について、非侵襲の推定値を算出していた。その化学特性は標準的な人工血液にも冷却液にも似ていない。弱い照明の下では銀色に応答する試料が、分光計のもとでは細い不連続の列となる。混ざり合わない複数の物質が、一つの流路を共有しているようだった。

試料は採っていない。ヴェイルがそう命じた。

「負荷の過渡変化で、ほんの一部が失われています」とサミラ。「エネルギーではありません。物質の在庫です」

ロイは印字された数値を見た。「どれほどだ」

「この器具で直接量れるほどの量ではありません。でも位相ずれが大きくなっています。再生成されない備蓄です」

「補充できるか」

「正体がわかれば」

ヴェイルは奇跡を嫌う技術者の目で出力を見た。「通常の電力備蓄は回復する。充電もできる。だがこれは違う。高出力の閾値を越えるたびに、何らかの活性成分が不可逆に消費されている」

「今日は高出力を使っていない」

「あんたの身体が、あんたの代わりに使ったのかもしれない」

ロイは、自分が動こうと決める前に始まった反射を思い出した。許可を求めない機械が、代価も知らせず彼を守っている。

「使い切ったらどうなる」

「わからん。自動的に遅くなるかもしれない。加速能力を失うのかもしれない。ある部分の動作に不可欠な触媒かもしれん。実験で確かめるのは御免だ」

初めてロイには、死よりも小さく、正確な問題が見えた。ある量が減っていく。いつか尽きる。引き算を理解するのに哲学は要らない。

「ならば使わない」

「結構」とヴェイル。「ここに来た誰より力があるのに、それを証明したくない患者は初めてかもしれん」

「証明したことならある」

「誰だってな。身体は請求書を忘れない」

◆ ◆ ◆

外からの最初の警告は市場の音として届いた。昇降機の囲いを叩く鈍い衝撃が三度、偶然とは思えぬ間隔で続く。ロイを地下に案内した修理屋が内部インターホンを開き、名前を使わずに告げた。

「南口に市民検査ユニットが二機。一機は軍用の手を持ってる。別の一機は市の配達員に化けている。回廊の持ち主が、俺たちのせいかと訊いてる」

「違うと言え」とヴェイル。

「信じませんよ」

「ならば、奴が知りたくないことに俺たちは責任があると伝えろ」

インターホンが切れた。

サミラは戸棚から筒状の遮断スリーブを取り出した。ヴェイルは首を振った。

「妨害電波は出すな。ここではな。遮断すれば介入がわかり、介入すれば場所がばれる」

ロイはコートに手を伸ばした。「出ていこう」

「まだだ。昇降機を使えば見つかる。ここに残れば、存在しないふりをしている役所へいずれ診療所ごと差し出すことになる。第三の道がある」

ヴェイルは洗浄系の下にある保守縦坑を指した。検査室から重力排水路へつながり、古い貨物通路まで抜ける。狭いが、機械なら通れる。そこにあるセンサーは、反応の鈍い旧式品に置き換えてあった。

「どこに出る」

「東の冷却運河の下だ。古い揚水所がある。公式の出入口を通らずに出られる」

「何分」

「あんたなら四分か。俺が通れば残りの人生全部を使うだろう」

ロイはシャツを着て、インターフェースの投影像のそばで立ち止まった。「この部品の製造元を教えろ」

ヴェイルは唇を結んだ。「あんたのを組み立てた者は知らない。ただ、互換性のある旧型在庫が最後に再生された経路なら知っている」

「どこだ」

「深圳ではない。輸入コードが三つ重なり、信用できる国家台帳がない移送管区だ。クアラルンプール南部の拡張製造地域。ハイパーサイバージャヤ行政管区」

彼は防水紙の四角い切れ端に所在地を書いた。

PUDU-ALPHA。

「操作員より古い装置が、なぜまだ意味を持つか理解していた商人がいた。店が今もあるかは知らん」

「名前は」

「書類上はスリヤ・コンポーネンツ。転送だけの幽霊会社かもしれん。認証媒体はソニー製であることもあった。メモリースティック PRO Duo。特殊な外装、強化端子。企業が保守台帳に残したがる類の、馬鹿げた遺物だ」

ロイは紙を見た。民生用の記録規格の名前に心当たりはない。異なる法域の都市名はなおさらだった。

「読み取り機は」

「存在した。古い修理台帳によれば、タイレルの研究所に専用治具が二組あった。会社が消えた時に誰が持ち去ったかは書かれていない。だから生き残った端子が重要なんだ」

ヴェイルは、ロイがカードを携行しているとは考えていなかった。実際ロイは持っていない。アクティベーションが行われたなら、それは彼の意識の外での出来事だった。現在のシステムは内部の何かで稼働し、原本媒体はどこか別の場所にある。おそらく、すでに彼を作った者の手元にもない。

「カードには何がある」

「実物を見たことはない。MagicGate のハンドシェイクへの言及を見ただけだ。検証済みの起動プロファイルをローカルキャッシュに保持すれば、何年でも動けるかもしれん。だがそのキャッシュが壊れ、ゼロから初期化しなければならないなら、原本と適合する治具が必要になる」

ロイはヴェイルを見つめた。死んだ記憶のある男なら、もう一度戻ってくるために条件が課されていることの意味を理解できた。

「治具は」

「まず供給経路を追え。ハードウェアは人間より秘密を守る」

◆ ◆ ◆

岡京で川村室長は紙の現場報告書を受け取った。執務室は十分に隔離されており、職員たちは静けさを安全と取り違えることがあった。対象は下層修理回廊に入った。軍事請負企業は即時封鎖を推奨し、市民検査部隊は登録照合の義務を主張した。

川村はどちらも承認しなかった。

「訪問先の人間には名前があるだろう」と佐伯に言った。

「イスカンダル・ヴェイル。義肢血管統合の元認可技術者。旧医療フランチャイズ改革で登録を抹消されています」

「タイレルと関係は」

「直接には。二次修理経路から入手した装置を引用する技術論文が数本あります」

「ならば対象は部品よりも過去を探している」

「両方かもしれません」

川村は市場通路の地図を、敵意ある方言で書かれた文書のように眺めた。「破壊的な突入は許可しない。技師の記録と対象を、無傷で押さえろ」

「請負側は対象が前例のない戦闘インターフェースを備えていると」

「正しい条件で測る前なら、誰もが前例のない戦闘インターフェースを持っていることになる。彼らの野心は証拠じゃない」

彼は命令を限定した。診療所の出口を監視し、映像は現地保管、中央AI分類器には対象を特定できる痕跡を注入しない。

佐伯は最後の行を二度読んだ。「不自然に見えます」

「そうだ」

「大臣室はモデルへの即時アクセスを求めています」

「旧式の認証遺物を調査中だと答えろ。退屈してくれる」

佐伯が去ると、川村は古い台帳を開いた。一行は、かつての受益者を今では認めていない水処理企業への研究助成金を示していた。別の一行には、研究補助機材に分類されたタイレルの専用治具二組が記載されている。

川村はそれを複写しなかった。

政府 AI から事実を隠す最善策は、ときに、その事実をデータにしないことだった。

◆ ◆ ◆

検査室では、検査ユニットが昇降機に到着した。法に適合した入室要求を発し、定められた待機時間が過ぎると機械式の強制解錠へ移った。時間の刻み方に残酷さも慈悲もない。ただ行政的だった。

ヴェイルは古い溶剤ポンプを始動させた。音はサービス回廊全体に響き、もっと小さな振動を覆い隠す。サミラがロイの背中から接続器を外す。そのときロイは彼女の手首をつかんだ。優しく、しかし両者が予測したよりも速く。

サミラは凍りついた。その目のわずかな動きに、修理された身体を持つ者が、ずっと速く動ける何かの前に立つ代償が見えた。

「すまない」とロイは手を放した。

「何か聞こえたんですか」

「壁の向こうでリレーが切り替わった」

最初のユニットはサービス通路に入っていた。一分もしないうちに検査室へ到達する。

ヴェイルは排水路の図面を広げた。市の画面からとうに消えた道筋が記されている。ロイは一目で記憶した。どうしてこれほど速く覚えられたのか、尋ねたくなかった。

「俺を助けて罰せられないか」

「いずれな。何の罪か明示する勇気のある者がいるかどうかだ」

ヴェイルは旧世代の身体の写真を検査台から遠ざけた。「以前あんたを連れてきた女は、全構成部品を交換しても、何が同じ人間を同じ人間たらしめるかと訊いた。『同じ』という語に背負わせる仕事が多すぎる、と俺は答えた」

「女は何と言った」

「問いは、それを発した人間が消えても生き残れる、と。患者について話していると思った。研究そのものの話だったのかもしれん」

ロイは考えた。ゼロセブンから十一までの年月を取り戻したい衝動はなかった。連続性の手法を試す時間だったなら、その欠落した期間は、そもそも自分の記憶と同じ意味で彼に属していたとは限らない。

「この身体を作った者を知りたい。そして、どれだけ保つのか」

ヴェイルはうなずいた。その問いが幾つもの種を暴力の縁まで追い詰めてきたとは、言わなかった。

「ならプドゥへ行け。ただし部品が注文者を覚えているとは期待するな」

◆ ◆ ◆

排水縦坑は十八メートル。ヴェイルの図面より狭かった。ロイは古い陶製の壁にコートを擦る音以外、ほとんど音を立てずに身を下ろした。管の継ぎ目に水滴がたまり、系統の大半は今では記録にすら載っていない。

背後の金属を振動が伝わった。保安ユニットが検査室の敷居を越えた。ロイは止まった。身体は加速に移りやすい姿勢へ傾き、人工的な深部に、あの望ましくない緊張が生まれた。

彼は抑えた。

もう一度振動。ユニットがヴェイルの作業台を走査している。機械が次の質問を選ぶ、句読点のような沈黙まで聞こえた。

彼の脈は落ち着いている。深いところにある蓄積器では、電荷がゆっくり回復していた。その輪郭を知覚することはできない。ヴェイルが述べた液体とは別物だ。今はその違いがわかる。力は待てば戻る。もう一方の資源は、二度と戻らないかもしれない。

彼はゆっくり進んだ。

縦坑の上で鋼板がずれた。明るいセンサー光が通路を掃いた。ロイは手のひらを壁に押し当て、動かなかった。光は止まり、やがて引いた。検査ユニットは空の溶剤容器を調べる方を選んだのだ。

一呼吸のあいだ、動きを予測する彼の一部が、もっと速い答えを提示した。鋼板を打ち破り、センサーを停止させ、次の走査前に通り抜ける。ロイは拒絶した。その答えなら数秒を稼ぎ、しかも代価を失う。

機械が去るまで待った。

縦坑の反対側は橋の下へ開き、冷凍設備の蒸気が汚れた雨に溶けていた。運河の向こうでは国家住宅のむき出しの壁面に広告が映し出される。承認された職業、保証された栄養、安定した生活の美徳。

ロイは影の中に立ち、ヴェイルの防水紙をもう一度読んだ。

PUDU-ALPHA。

彼は製作者を探しに来た。見つけたのは時代遅れの部品、名前のない女、記憶のない以前の身体、そして自分の顔が指名対象になりつつある管轄区域からの脱出経路だった。

頭上の橋を監視ドローンが通過した。こちらを向かなかった。

珍しく、機械たちは間違った問いを立てた。

彼は紙を折り、貨物地区へ歩き出した。そこでは政府がいまだ別々の国であるふりをしている場所へ向けて、都市が通行権を売っていた。